断片（Ⅱ）

寺田寅彦

一

連句で附句（つけく）をする妙趣は自己を捨てて自己を活かし他を活かす事にあると思う。前句の世界へすっかり身を沈めてその底から何物かを握（つか）んで浮上がって来るとそこに自分自身の世界が開けている。

前句の表面に現われただけのものから得た聯想に執着してはいい附句は出来ない。

前句がそれ自身には平凡でも附句がいいと前句がぐっと活きて引立って来る。どんな平凡な句でもその奥底には色々ないいものの可能性が含まれている。そ

れを握んで明るみへ引出して展開させるとそこからまた次に来る世界の胚子（はいし）が生れる。
それをするにはやはり前句に対する同情がなければ出来ない。どんな句にでも、云い換えるとどんな「人間」にでも同情し得るだけの心の広さがなくてはいい俳諧（はいかい）は出来ない。

二

九月二十四日の暴風雨に庭の桜の樹が一本折れた。
今年の春、勝手口にあった藤を移植して桜にからませ

た、その葉が大変に茂っていたので、これに当たる風の力が過大になって、細い樹幹の弾力では持ち切れなくなったものと思われる。

これで見ても樹木などの枝葉の量と樹幹の大きさとが、いかによく釣合が取れて、無駄がなく出来ているかが分る。それを人間がいい加減な無理をするものだから、少しの嵐にでも折れてしまうのである。

三

いわゆる頭脳のいい人はどうも研究家や思索家には

なれないらしい。むつかしい事がすぐに分るものだから、つい分らない事までも分ったつもりになってしまうようである。

頭の悪いものは、分りやすい事でも分りにくい代りにまたほんとうに分らない事を分らせ得る可能性をも有っているようである。

この事が哲学やその他文科方面の研究思索について真実である事はむしろよく知られた事であると思うが、理化学の方面でもやはりそうだという事はあまりよく知られていないようである。

四

ストウピンのセロの演奏を聞いた。近来にない面白い音楽を聞いた。

われわれ素人（しろうと）の楽器を弄（ろう）するのは、云わば、楽譜の中から切れ切れの音を拾い出しては楽器にこすりつけ、たたきつけているようなもので、これは問題にならない。しかし相当な音楽家と云われる人の演奏でも、どうもただ楽器から美しい旋律や和絃を引出しているというだけの感じしかしない場合が多いようである。こういう演奏には、感心はしても、感動し酔わされる事

はない。いつでも楽器というものの意識が離れ得ない。ストウピンがセロを弾いているのを聞いており見ていると、いつの間にか楽器が消えてしまう。演奏者の胸の中に鳴っている音楽が、きわめて自由に何の障害もなく流れ出しているので、楽器はただほんの一つの窓のようなものに過ぎないのである。

五

ヴィオリンをやっていて、始めてセロを手にしてみると、楽器の大きさを感じるのはもちろんであるが、

指頭に感じる絃の大きさ、指の開きの広さなどが、かなり不思議な心持を起させる。それで一と月二た月ヴィオリンを手にしないでいた後に、久し振りで取出して持ってみるとそれがいかにも小さくて軽くて、とてもものヴィオリンだとは思われないのでちょっと驚かされる。一音程に対する指頭間の距離でもまるで指と指とをくっつけなければならないように感じる。

それでヴィオリンをやったり、またセロをやったり、数回繰返しているうちに、だんだんにヴィオリンはヴィオリン、セロはセロの正当な大きさや重さやその他の特徴がはっきり認識されて来るのである。

西洋から帰って銀座通りが狭く低く感じるのも同じような事で別に珍しい事でもないかもしれないが、ともかくも一つの世界に常住しているものが、一度そこをはなれてその外の世界を見る事無しに自分の世界を正当に認識する事のいかに困難であるかという事実の一例にはなると思う。

六

司馬江漢（しばこうかん）の随筆というのを古本屋の店頭で見つけたので、買って来て読んでみた。こういう書物は縁のな

い方であるが、何か理化学方面に関する掘出物でもあるかと思ったからである。

春信（はるのぶ）の贋物をかいたという事で評判のよくない人ではあるが、随筆を読んでみると色々面白い事が書いてある。ともかくも「頭の自由な人」ではあったらしい。日本人の理化学思想に乏しい事を罵（ののし）ったり、オリジナリティのない事またそれを尊重しない事を誹（そし）ったりしているが、大正の現在でも同じような事を云っている人が多いから面白い。

朝顔の色を見て、それから金山から出る緑砂紺砂の色、銅板の表面の色などの事を綜合して「誠に青色は

日輪の空気なる（？）色なるを知る」などと帰納を試みたりしているのもちょっと面白かった。

新しもの好き、珍しいもの好きで、そしてそれを得るためには、昔の不便な時代に遥々（はるばる）長崎まで行くだけの熱心があったから、今の世に生れたら、あるいは相当な科学者になったかもしれない。そして結局何かしら不祥な問題でも起してやはり汚名を後生に残したかもしれない。

こういう点でどこかスパランツァニに似ている。優れた自由な頭脳と強烈な盲目の功名心の結合した場合に起りやすい現象であると思う。

この随筆中に仏書の悪口をいうた条がある。釈迦が譬喩（ひゆ）に云った事を出家が真に受けているのが可笑（おか）しいというのである。そして経文を引用してある中に、海水の鹹苦（かんく）な理由を説明する阿含経（あごんぎょう）の文句が挙げてある。ところがその説明が現在の科学の与えている海水塩分起原説とある度までよく一致しているから面白い。

また河水が流れ込んでも海が溢れない訳を説明する華厳経（けごんぎょう）の文句がある。大海有四熾燃光明大宝。其性極熱。常能飲縮。百川所流無量大水。故大海無有増減。とある。大洋特に赤道下の大洋における蒸発作用の旺盛な有様を「詩」で云い現わしたと思えば、うまい云

い方である。

（昭和二年一月『明星』）

底本：「寺田寅彦全集　第三巻」岩波書店
１９９７（平成９）年2月5日発行
入力：Nana ohbe
校正：noriko saito
２００４年8月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。